

千葉市における 源頼朝の伝説と 地域文化の創出に向けて — 千葉の町・鎌倉の町 —



元千葉市立郷土博物館 館長

丸井 敬司

はじめに

源頼朝は平治の乱で平清盛に敗れた源義朝の三男で、この合戦で捕えられ、伊豆の蛭ガ小島^{ひる}に流された。この頼朝が、挙兵を決意したのは以仁王^{もちひとおう}の令旨^{りょうじ}を受け取ったことが直接の動機とされている。

令旨を伊豆で受け取った頼朝は治承4年(1180)8月に挙兵し、伊豆の目代^{もくだい}であった山木兼隆^{やまきかねたか}を討つことに成功するが、続く石橋山の戦いで平家方の大庭景親^{かげちか}に敗れて船で安房に逃れた。

この敗軍の将であった頼朝を真っ先に助けたのが千葉介常胤^{つねたね}であった。

常胤は当時、下総国千葉庄(現在の千葉市)を所領とした豪族的領主で、頼朝が安房に到着すると真っ先に参陣を表明した。そして、一族を率いて平家方の千田親正^{ちだちかまさ}や下総国の目代などを討ち、下総国内の平家方を一掃した。

頼朝は同9月17日には下総国府に入城し、続いて頼朝は武蔵国に侵攻し、更に同年10月7日前後には相模国鎌倉に入り、ここを本拠地として東国政権を樹立した。

この頼朝の快挙は常胤をはじめとする房総の武士団の協力が不可欠であったが、特に常胤の影響が大きい。

今回の論文はこの常胤と頼朝との関係を常胤が本拠地とした古代の千葉の町と鎌倉の町を比較することで検証したい。

1 千葉の町

鎌倉は頼朝の父義朝が本拠地としていた場所であったが、頼朝が伊豆で挙兵した時点でその拠点を鎌倉に置くと考えていたのではなかったようである。

頼朝が挙兵時より鎌倉入府を考えていたと主張する研究者も多いが、『吾妻鏡』には頼朝が鎌倉に入ったのは千葉介常胤の勧めによるとされている。

さて、頼朝は、10月7日頃、鎌倉に入ったが、同年10月9日、鎌倉の大倉の地に御所の造営に着手した¹。続いて、同12日、由比郷(現、材木座)にあった鶴岡若宮(現在の元八幡宮)を小林郷北山に遷座した²。

こうして鎌倉の町づくりが始まったが、この鎌倉と同様な配置で造られた町が中世の千葉の町である。

千葉の町は平安末期の大治元年(1126)に房総平氏の支族大椎氏(後の千葉氏)が千葉に入部したことから始まる。

千葉氏は千葉入部の時期にはその本拠地は通常の当時の豪族と同様、耕作地に面した微高地に構えられたものと考えられている。

この時点で千葉氏が最も重要視していたのが、淡水化した池田の池(後の本町・鶴沢地区)を耕地化することであった。

このため当初、千葉氏が館を構えた最も可能性の高い場所は池田の池に面した千葉市中央区道場北町の「旧来迎寺跡地」であったと考えられる(図

1 頼朝は、『吾妻鏡』治承4年10月9日の条に「為大庭平太景義奉行。被始御亭作事。」とあり、頼朝の居所として大倉の御所の造営を大庭景義に命じた。

2 『吾妻鏡』同4年12日の条に「小林郷之北山。構宮廟。被奉遷鶴宮於此所。以専光坊暫為別当職。令景義執行宮寺と事」とあるように、その三日後の同4年10月12日に鶴岡八幡宮を由比ガ浜から遷座し、その別当として専光坊を補任している。頼朝が、鎌倉に本拠地を定めると同時に鶴岡八幡宮を由比浦から北山に移したのは、その位置から考えて鎌倉という空間を「四神相応」の地に見立てて、八幡宮を玄武の位置に移したとしてよいだろう。

図1 千葉氏入部時の千葉の町

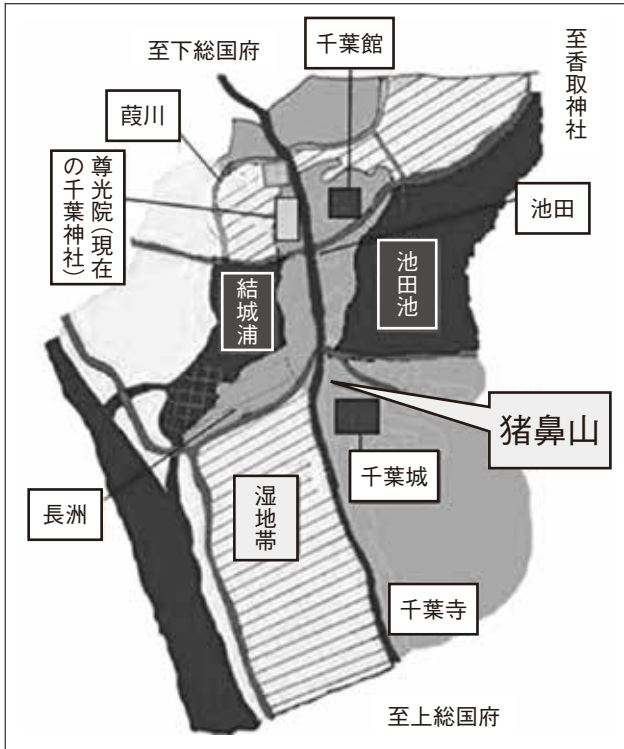
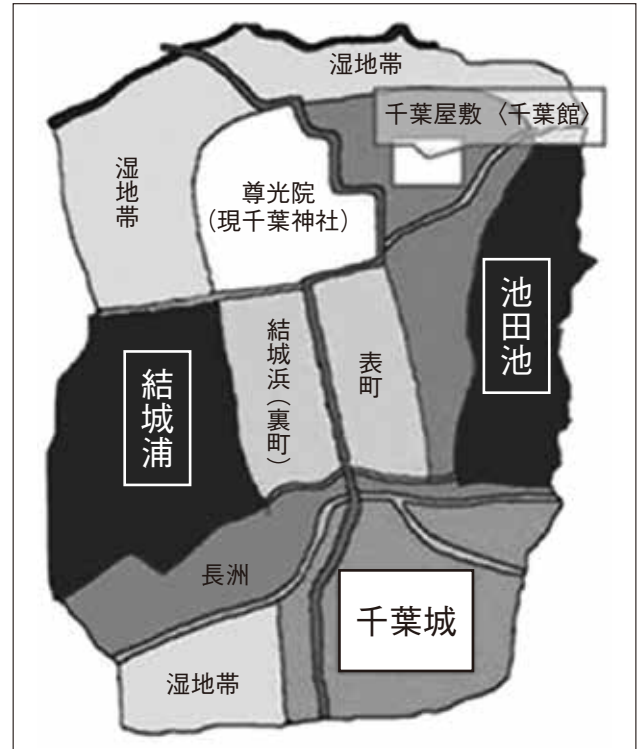


図2 平安末期の千葉町復元図 (丸井作成)



1 参照)。

ここは標高約4mの微高地にあり、本町・鶴沢などの耕地を一望できる場所である。当時、都川が池田の池に流れ込み、現在の要町付近で葭川に合流していたが、ここは都川の水利権を確保する絶好の場所である。

また、戦前までは西側と南側には堀跡が水路として残っていた。

更に、この地は水戸黄門の日記である『甲寅紀行』には「妙見寺の東に千葉屋敷(「千葉館」のこと)あり」と書かれている。

この場所は、後、来迎寺となった。同寺は南北朝期の創立と伝えられる寺で、千葉介氏胤以下7基の五輪塔がある。こうした条件から考えると、本来ここには千葉氏の館が建てられていた可能性が高い。

しかし、この地は農業に

従事するには適するが、外敵の侵入を防ぐには不向きである。こうしたことを考えると千葉氏は同館の建立と同時に適当な高さのある要害的施設を造ったものと考えられる。これが猪鼻山の館(千葉城)である。

ここからは平安期に城砦が建てられていたことを示すような確実な遺物は出土していないが、この地が戦国期頃まで城砦として使われていたことを考えると、当初ここに埋まっていた遺物は、後

図3 旧来迎寺跡地



(千葉館カ。「迅速図」)

図4 猪鼻山付近



(「迅速図」)

の工事で遺失したものと考えなければならないであろう。

元々、城砦は常に新しく整備され続けるのが普通であり、現存する城や館が後世まで使われていた場合、成立当初の遺物が残っている例は少ない。

2 鎌倉の町

一方、鎌倉の町の特徴は鶴岡若宮の遷座の際、その位置が鎌倉の都市空間の北部に位置する小林郷北山に遷したことにあるが、問題はその遷座の時期が頼朝の鎌倉入府の5日後であったことにある。

こうした源氏に関わる八幡宮の遷座が、これまで町の都市空間の北に建立した事例が見あたらないことから考えると、この遷座は頼朝を始めとする東国武士団が同神社を町の北の方角に遷すこと^{こだわ}に拘ったことと考えてよいであろう。

こうした聖域を都市空間の北部に置くことは、唐の長安の町やわが国の奈良・平安京などの事例がある。しかし、これらの場合は中国の皇帝やわが国の天皇が北辰の神（天皇大帝・北極星）と同一化されていたことによるものと考えられる。

さて、ここで述べる北辰とは道教上の用語で、北極星やそれを神格化したものであるが、これを仏教的に考えると妙見菩薩となる。

頼朝や東国の武士団が、鶴岡若宮の遷座にあたって、この神社を鎌倉の町から考えて北の位置（道教の玄武）^{うつ}に遷したことは、鶴岡若宮の八幡神を道教における四神の玄武と見^{みな}做したことを意味する。

こうした既存の八幡社に妙見の神格を加えるような事例は房総半島には多く確認される。

この場合、守谷城の妙見八幡神社、竜ヶ崎市の

図5 中世の鎌倉町復元図（丸井作成）



妙見八幡神社などのように社名を八幡社の前に妙見とする場合がある。しかし、尊光院（現、千葉神社）のように妙見の別当寺を町の北側に建立することで、事実上、八幡社を妙見社とする例もある（こうした八幡に妙見の神格を加えたものを「千葉型の八幡信仰」という）。

こうした事例から考えると筆者は、鶴岡若宮は典型的な「千葉型の八幡信仰」の寺院であったと考えている。

さて、これを示す根拠には鶴岡八幡宮において妙見信仰の祈祷方法である尊星王法が行われていた³ことがあげられる（『吾妻鏡』）。

また、千葉氏が13世紀の中頃に制作したとされる『平家物語』の一種である『源平闘諍録』の「妙見説話」にもそれを窺^{うかが}わせる説話が登場する。

『闘諍録』(巻五ノ三、妙見大菩薩の本地の事)には「右兵衛佐（頼朝のこと）これを聞き、実に目出たく覚え候、しからば、聊^{いささか}頼朝がもとへも渡し奉らんと欲す、如何にあるべきや」とあり、

3 尊星王法は妙見信仰の密教的な修法で、『吾妻鏡』によると鎌倉幕府はこの尊星王法を10回にわたって鶴岡八幡宮内において行っている。

千葉市内の結城（現在の千葉市中央区中央の東半分の地域）で起こった「千田合戦」の後、常胤・成胤など千葉氏一族が頼朝と面会した際、頼朝が常胤に妙見を渡すように要請したとされる。

常胤はこの時、頼朝の要請を拒否したが、同時に「君の御方へ参り向かって、仕へたることは偏（ひとへ）に（妙見）大菩薩の御渡り有ると思食（おぼしめ）さるべく」と答えている。

筆者は『闘諍録』における、この頼朝と常胤のやり取りは鶴岡八幡宮の遷宮によって石清水系の八幡信仰が「千葉型の八幡信仰」に変容したことを後世に伝えるメッセージであったと考えている。

なお、実際、鎌倉が若宮大路を中心に都市的な景観を呈するようになったのは北条氏が実権を掌握してからとする考え方が一般的である。歴史家の斉木秀雄氏は鎌倉が都市化された状況を源氏三代と北条氏支配の頃、足利氏支配の頃に分け、「源氏三代は、八幡宮の東側に大倉御所など幕府の重要な建物や永福寺、勝長寿院など寺院が建てられるが、これは自然発生的なもので、北条氏が支配していた頃の鎌倉が・・・最も「都市」であった」としている。

しかし、結果的に鎌倉が北条氏の支配していた時期に最も栄えたとしても頼朝が居を鎌倉に構えた段階で、鶴岡若宮を鎌倉の町の北端（玄武）に遷座し、その前に若宮大路を建設したことは確かであり、また、頼朝やそれに従う東国武士団が早くからこの区域を都市空間として想定し、将来の町づくりを計画していたことも確かであろう。

このように鎌倉の町は中国北辰信仰の齊整主義（街並みが東西南北に整って造られたこと）に基づく都市型の町づくりが行われたが、先に述べたように鶴岡八幡宮とその前に作られた若宮大路はその地形上の制約を受けて約32度傾いている。

これに対して千葉の町は広小路の方位角が現在の角度で354度（これは、この町が出来た平安時

代末期の磁石の北の角度に相当する）である。

これは千葉の町が、当時、最新の土木機器である磁石を使用して正確に南北の方向に建設されたことを意味している。

こうした関東地方の代表的な中世都市である鎌倉の町と千葉の町を比較すると頼朝は鎌倉の町を建設するにあたって千葉の町を参考にした可能性が高い。

おわりに

鎌倉の町の建設には現在も多くの謎があると言われている。この町の中心となった鶴岡八幡宮の遷座が、頼朝の鎌倉入府の5日後という短期間であったことも、この謎の一つとされる。

当然、これは不可能なことであるが、もし、頼朝が事前に千葉の町を見ており、これを参考にして鎌倉の町が建設されたとするならば、鶴岡八幡宮の遷座が頼朝の鎌倉入府後、僅か5日で行われたとされることについては、かなりの突貫工事であったものの、それは可能であると考えられる。

恐らく、頼朝やそれを支えた常胤を中心とした関東武士団は鎌倉に入府する途中に千葉の町を見て鎌倉の町づくりを考えたのであろう。

なお、筆者がこの結論を導くためには、都市計画の関係者や自然科学の研究者からのアドバイスをいただいた。こうした歴史を文献のみで解釈するのではなく、自然科学の知見をも加えることで史実的証明が可能となる場合もある。

鎌倉は現在、世界遺産の候補地として推薦されているが、こうした鎌倉の町の建設に纏わる問題については歴史学の成果に加えて都市計画や測量学、地質学などの自然科学の成果も取り入れて世界にアピールすることは有効な方法と思われる。また、こうした方法論は今後の地方の歴史を考える上では重要な課題となろう。